

仙台市文化財調査報告書第8集

仙台市向山

愛宕山横穴群発掘調査報告書

昭和49年5月

仙台市教育委員会
仙台市建設局道路部

仙台市文化財調査報告書第8集

仙台市向山

愛宕山横穴群発掘調査報告書

昭和49年5月

仙台市教育委員会
仙台市建設局道路部

序

仙台市向山の愛宕山周辺には、愛宕神社、虚空蔵堂などをはじめ数多くの寺社があり、藩政時代から仙台地方の総鎮守として仙台市民の尊崇する地域でありました。また、一部識者の間では数多くの横穴古墳が存在することも伝えられ、第二次大戦前後の宅地造成、防空壕築造工事などに際して古人骨や土器、刀などが発見されたという噂もかなりあったようです。

このたび、仙台市都市計画道路予定区域内にこの横穴群の一部がかかったため事前調査を実施することとなりました。調査は2回に分けて実施されましたが、横穴の損壊が著しく、わずかに残された遺存痕跡を記録することがせいいっぱいの状況でした。

しかし、従来、この横穴群に関しては正式な学術記録がほとんどなく、その実態も一般にはほとんど知られていなかったことを考えますと、いま多少なりとも学術的記録を残すことができましたのは、それなりに意義あることと考えます。

最後に、調査の遂行に御努力、御協力頂いた多くの方々に対し厚く感謝申し上げますとともに、こうした記録が最大限に活用され、郷土文化の向上に資することができますならば望外の喜びと存じます。

昭和49年5月

仙台市教育委員会 教育長 佐藤 敬

例　　言

1. 本書は、仙台市建設局道路部企画の仙台市都市計画道路元寺小路——郡山線路線内にかかった、仙台市向山愛宕山横穴群B地点の緊急発掘調査報告書である。
2. 本書は、仙台市建設局道路部の委託により仙台市文化財保護委員伊東信雄を調査担当者として、仙台市教育委員会が実施した発掘調査の記録である。
3. 本書の内容は、緊急発掘時の経過および所見と若干の考察を含むものである。
4. 本報告の執筆には、出土人骨に関する所見として葉山杉夫（東北大学歯学部解剖学研究室助教授）があたった他は、岩渕康治（仙台市教育委員会社会教育課主事）があたった。また、本報告の編集は、伊東の指示のもとに岩渕が行った。
5. 本報告の実測図などは、すべて岩渕が統一的に作成した。
6. 出土人骨の処置にあたっては、東北大学歯学部解剖学研究室の協力を受けた。
7. 愛宕山横穴群に関しては昭和48年8月に概報を発行しているが、今回の記載をもって優先するものと解していただきたい。

本文目次

| | |
|-----------------------|------------------|
| 序 | 仙台市教育委員会教育長 佐藤 敏 |
| 例 言 | |
| 1. 横穴群の位置と環境 | 1 |
| 2. 調査に至る経過 | 3 |
| 3. 調査経過 | 4 |
| 4. 調査内容 | 7 |
| イ. 横穴分布の概況 | 7 |
| ロ. 各横穴の状況 | 8 |
| ハ. 出土遺物について | 14 |
| 5. まとめ | 15 |
| 6. 仙台市内の横穴群とその地域的位置づけ | 16 |

挿 図

| | |
|--------------------|-------|
| 第1図 位置図 | 2 |
| 第2図 横穴分布状況図 | 6 |
| 第3図 大年寺山、愛宕山付近横穴群図 | 7 |
| 第4図 横穴実測図(1) | 9 |
| 第5図 横穴実測図(2) | 11 |
| 第6図 横穴実測図(3) | 13 |
| 第7図 須恵器実測図 | 14 |
| 表. 仙台市内の横穴群と関連遺跡 | 19 |
| 第8図 同上分布図 | 21-22 |

図 版 目 次

| | |
|------|-----------------------|
| 図版 1 | 仙台市向山周辺航空写真 |
| 図版 2 | 愛宕山、大年寺山横穴群遠景 |
| 図版 3 | 愛宕山横穴群 B 地点、原状および調査状況 |
| 図版 4 | 1号、2号墳 |
| 図版 5 | 2号内面、4号墳 |

図版 6 6, 7, 8 号墳および 8 号内面

図版 7 9 号墳および須恵器

第 2 次調査地区および調査状況

1. 横穴群の位置と環境（第1図、図版1、2）

愛宕山横穴群は、仙台駅南方1.7キロ、仙台市向山、越路などにかけて所在する一大横穴群である。すなわち、国道4号線が仙台駅よりほぼまっすぐ南下してきて、東流する広瀬川につきあたって東南方に屈折しているが、ちょうど屈折点の南対岸に標高74mの、あたかも孤立丘のような愛宕山がある。愛宕山横穴群は、この愛宕山の南北斜面に群在する。

地形的に見ると、青葉山、八木山の仙台市西南諸丘陵と旧市街が形成されている段丘地帯とを蛇行しながら東西に分かつ広瀬川の南岸にあたり、北側前面に旧市街を広くのぞみ、南背面に標高100m内外の丘陵群が迫るといった状況にある。地質的には広瀬川凝灰岩層を基盤とする。横穴群は丘陵の中腹から裾部付近、標高30m前後の崖面に築造されている。

このうち、愛宕山横穴A地点は、愛宕山北側崖面、前面に広瀬川をのぞむ位置にあり、B地点は愛宕山東南斜面、大年寺山との間の狭い沢をのぞむ位置にある。

次に、横穴をとりまく周辺の歴史的環境について述べてみたい。

現在、市街地を一望にのぞむ位置にある愛宕山には、藩政期仙台の総鎮守といわれた愛宕神社、虚空蔵堂などがあり、藩政期仙台の精神的よりどころと考えられていたことが伺える。この他にも愛宕山を中心として周辺区域に多くの寺社が集中している。

藩政以前にあっては、まず東街道の要衝を占めている地形的条件から、中世において、名取地方の領主栗野大膳が居城した茂ヶ崎城がある。また経筒が出土したこともあり^①、経塚の存在も考えられる。古代の遺跡として注目されるのは、古墳、横穴などの集中である。このうち、高塚古墳は仙台市史によれば2基ほどあったらしいことが報ぜられている^②が、現在はすでに宅地化されて失われ、その実態をほとんど知りえない。横穴古墳の存在は、識者により、戦前から逐次報ぜられてきたが、地域的に全貌を調査した報告はまだ出されたことがなく、この地域の横穴古墳の規模、性格などについては一般にはほとんど明確にされていないのが実情である。しかも、戦後の急速な宅地化の波は、古代にあっては地形的にあまり集落形成に好適とはいえないかったであろうこの地域にもおしよせ、これら横穴群の保存にもかなり影響を及ぼした。すなわち、壊滅し、また防空壕に、民家の物置きに変造されて使用されたものは数多く、良好に保存されている横穴は稀少といってよい状況である。しかし、それにも拘らず、今なお現存している横穴の数は、愛宕山およびその隣接地域において数十基を越えるものと考えられる。これらの横穴の被葬者は、おそらく、現在の仙台市街部において形成された集落に関連する豪族層であろうと考えられ、今は全く古代の足跡を探ることの困難な仙台市街部の古代からの発展の形跡を探りうる稀少な遺跡の一つとして注目される。

原始時代における遺跡の存在は、この地域では今の所ほとんど知られていない。わずかに仙



第1図 位置図

台市史によれば、前記高塚古墳の盛土中に、縄文土器、石器が見られた^③とのことで、こういった点から、縄文遺跡が付近に存在していたであろうことを憶測する程度である。また、断片的に、隣接区域から縄文土器など出土する地点が2、3あるが実態は全くわかっていないのが現状である。

以上を通してみると、この地域の歴史的環境を考える上で特に注目されるのは、古代から中世、近世を通じて住民の生活の場というよりは、要塞ないしは信仰、祭祀といった精神的環境を形成してきたことが注目される。

2. 調査に至る経過

愛宕山横穴群については、從来、戦前、戦後を通じ正式調査がなされたことは一度もない。しかし、この横穴群が全く注目されないできたわけではない。昭和13年、清水東四郎氏により、愛宕山B地点の横穴群の分布状況が紹介されている^④。また、山中権氏は、大年寺山北側斜面に横穴が存在することを紹介している^⑤。その後、第二次大戦中に、この付近にさかんに防空壕が掘られ、また、横穴そのものを改造して防空壕としたものなどもかなりあった。戦後は付近に急速に宅地化の波がおしよせ、家屋建築中に、人骨や刀子、須恵器などの出土があった模様であるが実態は全くつかめない。現在もなお、民家の物置きとして使用されている横穴も少なくない。いずれにしろ戦中、戦後の混乱期をへて、横穴群は著しく損壊、改造されてしまつており、学術的にもさしたる注目をえぬまま、これらの横穴群は消滅しようとしていた。以上のようないくつかの状況から、名称についても一定した名称がなく、分布状況の詳細な検討などもなされたことがない。名称については漠然と「仙台市向山の横穴群」と呼ばれていたが、この名称は、愛宕山横穴群、大年寺山横穴群、宗神寺下横穴群^⑥などを包括した名称であった。

こうした状況下にあって、昭和47年、仙台市道路部企画の都市計画道路予定路線内に、愛宕山横穴群B地点がかかっていることが判明したため、仙台市教育委員会では、その対策について、道路部と協議を行った結果、道路部の委託により、仙台市教育委員会が、仙台市文化財保護委員伊東信雄を調査担当者として、事前調査にとりかかることになったものである。

〈第一次調査〉

○調査期間：昭和48年6月15日～6月19日（愛宕山B地点南側）

〈第二次調査〉

○調査期間：昭和48年10月24日～10月26日（愛宕山B地点北側）

○調査主体：仙台市教育委員会

仙台市建設局道路部

- 調査担当者：伊東信雄（仙台市文化財保護委員）
- 調査員：岩間康治（仙台市教育委員会社会教育課）
- 調査参加者：〔東北学院大学考古学研究部〕山田稔、高橋勇治、大槻良子、富沢美也子、宍戸宏和、新沼秀二、高橋秀人、西原克久、他
- 調査協力：葉山杉夫（東北大学歴史学部解剖学研究室助教授）、宮城県教育庁文化財保護課、
- 調査専門事務局：仙台市教育委員会社会教育課（課長）東海林恒英、（前課長）黒沢充、（文化財係長）瀬戸捷夫、（主事）鈴木高文、朝倉秀之、八木伸善、（嘱託）大泉重治、

3. 調査経過

調査は、都市計画道路予定区域中、仙台市向山四丁目の愛宕山B地点に限定して実施された。東西に細長くのびる愛宕山の東端にあたる区域で、丘陵の南北両斜面について、調査を実施することになったが、土地買収など諸般の事情により、南側斜面を昭和48年6月に実施し、北側斜面については昭和48年10月と二度に分けて実施した。

〈調査前の状況〉

調査前における遺跡周辺の状況は南側斜面の宅地化が進み、崖面も多く削られており、用地買収後、家屋とりこわしが終って崖面に防空壕が点々と所在するのが観察されていた。北側斜面は勾配45度以上の急傾斜の雑木林で、崖の最下間に数穴の防空壕がほらされている程度であったが、地形的に一連の傾斜であるA地点において横穴群が所在するので、この付近にも横穴群が所在する可能性が考えられたので、調査を実施することとした。

〈第一次調査〉

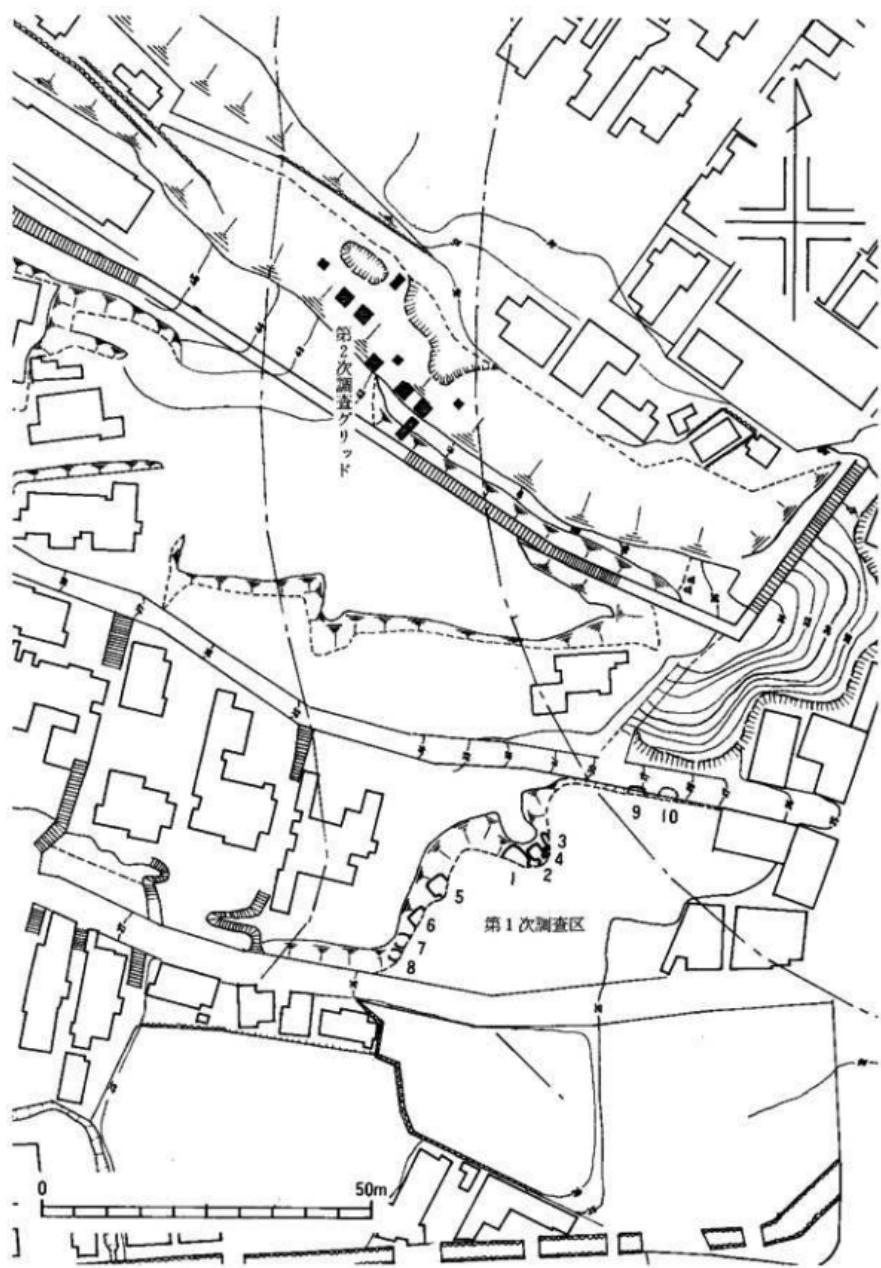
第一次調査は、昭和48年6月15日～19日にかけてB地点南側斜面を対象として実施された。第一次調査で実施した南側斜面における横穴群の状況は、古くから宅地化が進み、また、戦中の防空壕による改造、民家の物置などに使用された形跡などが著しく、横穴古墳としての原形を良好に保っているものはほとんどなかった。したがって、調査の主眼も、どの程度横穴古墳の原形がとどめられているかを記録し、当初の形態を復原、想定することがねらいであった。調査方法は、開口している横穴がほとんどだったため、平面的な表上排除は行わず、ボーリング探査、横穴内の埋土排除などによって横穴の現況の追求に努めた。

調査の結果、南側斜面においては、最低10基の横穴が存在していたことが判明。内9基について実測を行った。ほとんどが玄室すら十分に遺存せぬ状況であったが、玄室は無棺座（棺を安置する特別な施設のないもの）のみで、とくに1号、2号墳には排水溝が検出された。出土

遺物として、腐蝕し、泥上化した人骨片、および副葬品と考えられる須恵器1点が1号墳から発見された。その他付近には、防空壕として利用された穴が數穴認められたが、これらについては、現在の利用状況および用地買収範囲外といった関係から、調査を実施することが不可能であったため、調査は行わなかった。

〈第二次調査〉

第二次調査は、用地買収交渉などの関係から、当初の予定より遅れ、昭和48年10月24日～26日にかけて、B地点北側斜面の雜木林を対象として実施した。北側斜面の状況は、南側斜面の状況とは全く異なり、かなりうっそうとした雜木林であったため、調査は当然、横穴所在の有無を追求することに主眼がおかれた。また、崖面の下半については道路などではば垂直に削除されていて、崖面最下部付近には、明らかに防空壕と認められる穴が認められた程度であった。すなわち、斜面全体に3m間隔のグリットを設定し、表土排除作業を行って、横穴の所在確認作業を行った。調査合計面積は約29m²に及び、凝灰岩層に達するまで発掘したが、遺構および遺物と考えられるものは、全く検出されなかった。



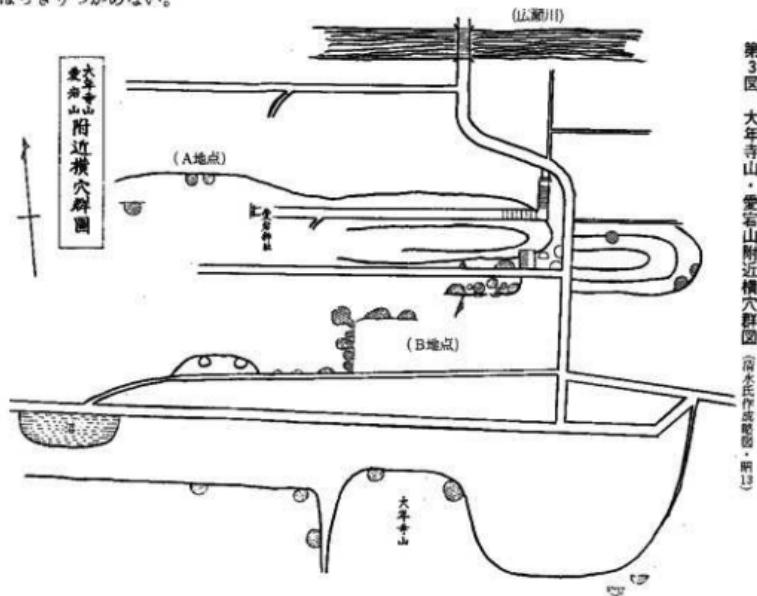
第2図 横穴分布状況図

4. 調査内容

① 横穴分布の概況 (第2図、図版3)

各横穴の名称は、主として調査の順序によるもので1~10の番号を付した。各横穴は、やや内湾した崖面の凝灰岩をくりぬいて作られている。平面的には、1~4号、5~8号、9、10号が、それぞれ近接して造られている。その立面上の配置状況は、上下二段からなり、1、2、5号が下段、3、4、6~10号が上段に位置する。下段の床面の標高は約26mである。概して各横穴は東南方向に開口している。これらのうち、もっとも遺存状況のよかつたのが2号で、玄室奥壁がくりぬかれている以外は、玄室の遺存状況はよく、玄門のほか、渓道の一部も遺存していた。全体的に各横穴の遺存状況はよくなかったが、とくに、7号、8号は、防空壕築造の際の変造が著しく、玄室側壁の一部と床面の一部の遺存を見る程度であった。形態として注目すべきは4号横穴で、一般の横穴に比し、きわめて小さいもので、構造的にもやや異質な点が見られた。

なお、清水東四郎前掲著添付図(第3図)によれば、この地区に、10数基の横穴が存在していることが報せられているが、この図中の横穴が、今回調査の横穴とどのように対応するか、はっきりつかめない。



② 各横穴の状況

(a) 第1号墳(第4図上・図版4-1)

○位置…下段。今回の調査区域内ではほぼ中央部に位置するものである。東南方向に開口している。

○遺存状況…玄室のみで、玄門、羨道などは検出できなかった。玄室自体も、すぐ近くに家が建っていたため、天井部および南側壁面などが削除されていた。床面は、西南部が削られているほかは、遺存状況はよかったです。

○玄室の状況

- 平面形態、規模など…3.2m（軸長）×2.6m？（幅）で長方形である。今回の調査横穴では、最大規模のものである。
- 立面形態、高さ…高さは天井部が削除されているため不明。立面形態はアーチ型と考えられる。
- 床面の状況…床面には、平均厚10cm前後の、2～3層にわたる埋土の堆積が見られた。とくに最下層には、1cm程度の厚さで、黒褐色のきわめて粘質の層があり、その層の中から、奥壁よりて、齧歛した人骨の破片が10点ほど検出された。最下層に位置し、副葬品と思われる須恵器（長頸壺）が、同一層中より発見されていることなどにより、築造当初の人骨と思われる。また、玄門寄りで、多数の人頭大河原石の出土を見たが、これらは、埋土の最上層に位置し、後世流れこんだ石と見るべきであろうが、あるいは、玄門閉塞石が後世入りこんだのかもしれない。床面そのものは、ところどころに浅い凹凸も見られるが、概して平坦で玄門の方に向けてゆるく傾斜している。また、玄室のほぼ中心部から玄門の方に向けて、巾20cm、深さ5cm、断面U字形のまっすぐな溝が検出されたが、これは排水溝と思われる。
- 壁面の状況…全体的に剥落が著しく不明。
- 出土遺物…人骨、須恵器（長頸壺）

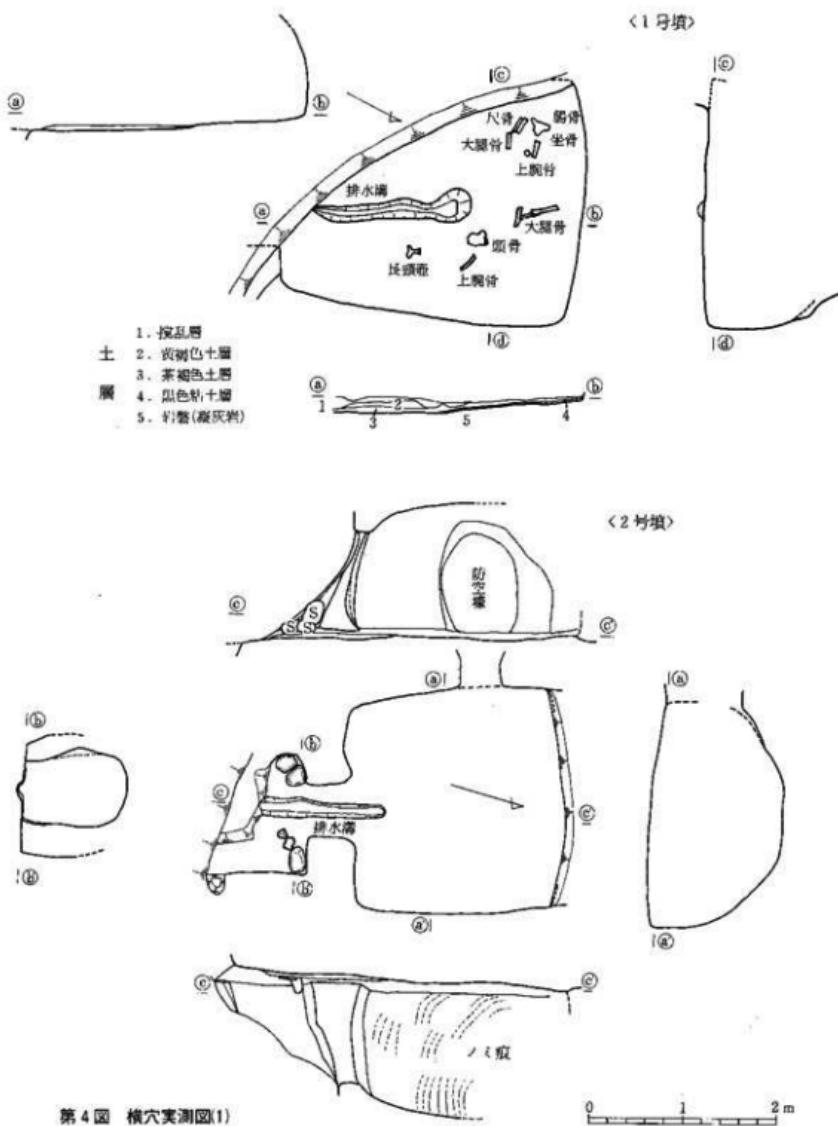
(b) 第2号墳(第4図下・図版4-2)

○位置…下段。1号墳の東隣りに並列する。東南方向に開口する。

○遺存状況…玄室の奥壁が防空壕として利用された際に完全にくりぬかれている他、西壁の一部がこれも防空壕の出入口用にくりぬかれている。玄門は一部に剥落が見られるがよく残っている。玄門前には、羨道が一部遺存していたが、天井部は崩落していた。

○玄室の状況

- 平面形態、規模…（軸長）2.3m×（巾）2.4mのほぼ正方形。
- 立面形態、高さ…アーチ形。高さ1.4m。



第4圖 横穴実測図(1)

- 床面の状況…全般に平坦で、奥壁より玄門方向にかけてゆるく傾斜し、また、中心部が周辺より若干くぼんでいる感じである。玄室入口より玄門、羨道にかけて幅15cm、深さ6cm、断面U字形の溝が検出された。排水溝であろう。
- 壁面の状況…壁面には、のみによる削り整形の痕がほぼ全面に見られた。のみ痕は、上下一定方向に、幅8~9cmで上下3段ぐらいになっている。(図版5-1)

○玄門の状況

- 形状、規模…軸長50cm、幅60cm、高さ1.1m、立面形態はアーチ形である。
 - その他…玄室から玄門を通じて羨道部に達する排水溝が底面に穿たれている。また、人頭大河原石が数個検出されているが、おそらく閉塞石が流入したものであろう。
- 羨道の状況…前方が家屋築造のため削除されており、遺存している部分の天井部も崩落している。長さは現存1m、幅1.3m、高さ、立面形ともに不明である。排水溝が底面を走っているほか、羨道の奥壁に接して人頭大の河原石が数個検出されている。閉塞石として積み重ねられたものの名残りと見られる。

(c) 第3号墳(第5図上左)

○位置…上段。2号墳の東隣り。東南方向に開口。

○遺存状況…玄室のみ遺存。玄門、羨道削除。

○玄室の状況

- 平面形態、規模…軸長1.4m以上。巾0.7m前後。小規模な造りで細長い袋状を呈す。一般的な横穴とは構造的に趣きを異にする。類例として善応寺横穴13号墳^⑦がある。
- 立面形態、高さ…アーチ形、高さ60cm。
- 床面の状況…全般に平坦で、玄門方向にゆるく傾斜する。排水溝などの施設は見られない。
- 壁面の状況…崩落著しく不明。

(d) 第4号墳(第5図上右・図版5-2)

○位置…上段。3号墳の西隣りに並列。2号墳の上方に位置。東南方向に開口。

○遺存状況…玄室のみ南半が削平されて遺存。

○玄室の状況

- 平面形態、規模…軸長60cm以上。巾30cm。きわめて小規模な造りで3号墳と構造的に類似する。
- 立面形態、高さ…アーチ形、高さ25cm。
- 床面の状況…平坦で玄門方向にゆるく傾斜。
- 壁面の状況…崩落し不明。

(e) 第5号墳(第5図下)

○位置…下段。1号墳の西方、やや離れて位置する。東南方向に開口。

○遺存状況…玄室のみ。一部削除。玄門、羨道検出できず。

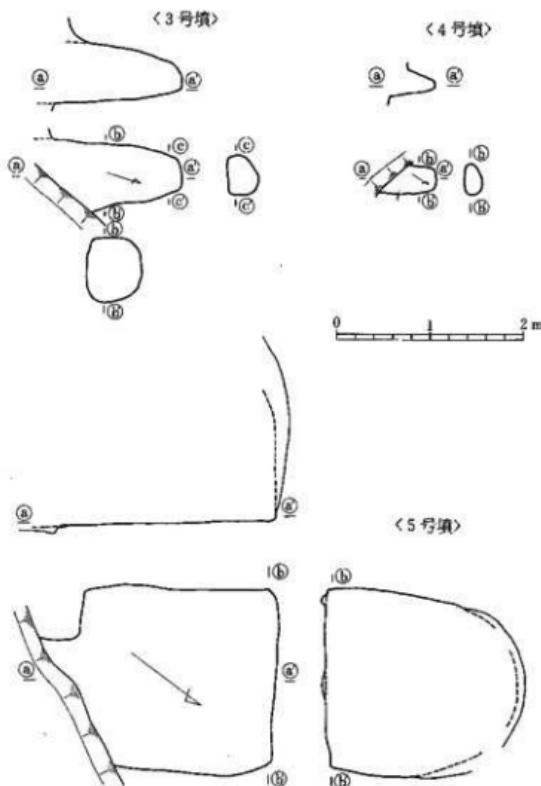
○玄室の状況

●平面形態、規模…軸長2.1m×巾2.0mのはば正方形。

●立面形態、高さ…天井部崩落のため判然としない。推定アーチ形。

●床面の状況…炭が一面に見られ、床面にかなり凹凸があるが、これらは床面上にゴミ土などがかなり堆積していたので近世の作為によるものであろう。排水溝は検出できなかつた。

第5図 横穴実測図(2)



- 壁面の状況…倒落のため不明。

(f) 第6号墳(第6図上左・図版6-1)

○位置…上段。5号墳の西隣り上方に位置する。東南方向に開口。

○遺存状況…玄室のみ。半分近くが削除。

○玄室の状況

- 平面形態、規模…現存軸長1.9m以上。幅2.5m。本来の形態が正方形か長方形かは不明。

- 立面形態、高さ…天井部崩落の為不明。

- 床面の状況…全体に凹凸が目立つ。玄面方向にゆるく傾斜。排水溝は検出できず。

- 壁面の状況…倒落のため不明。

(g) 第7号墳(第6図上右・図版6-1)

○位置…上段。6号墳の西隣りに並列。東南方向に開口。

○遺存状況…防空壕としての利用の際に甚しい変造がなされ、玄室、壁面、床面の一部が遺存している程度であった。

○玄室の状況

- 平面形態・立面形態・床面の状況など…不明。

- 壁面の状況…巾8cm前後の上下方向のやや荒いのみ整形の痕跡が一部に見られる。

(h) 第8号墳(第6図下左・図版6-1)

○位置…上段。7号墳の西隣りに並列。東南に開口。

○遺存状況…7号墳同様防空壕による変造甚しく、玄室、壁面、床面の一部が遺存している程度。

○玄室の状況(図版6-2)

- 平面形態、立面形態、床面の状況…不明。

- 壁面の状況…巾8cm前後の上下方向の、やや荒いのみ整形痕が一部に見られる。

(i) 第9号墳(第6図下右・図版7-1)

○位置…上段。3号墳の東側、やや離れて位置する。

○遺存状況…玄室のみ。前方半分は削除。

○玄室の状況

- 平面形態、規模…現存の軸長1.1m。巾2.5m。

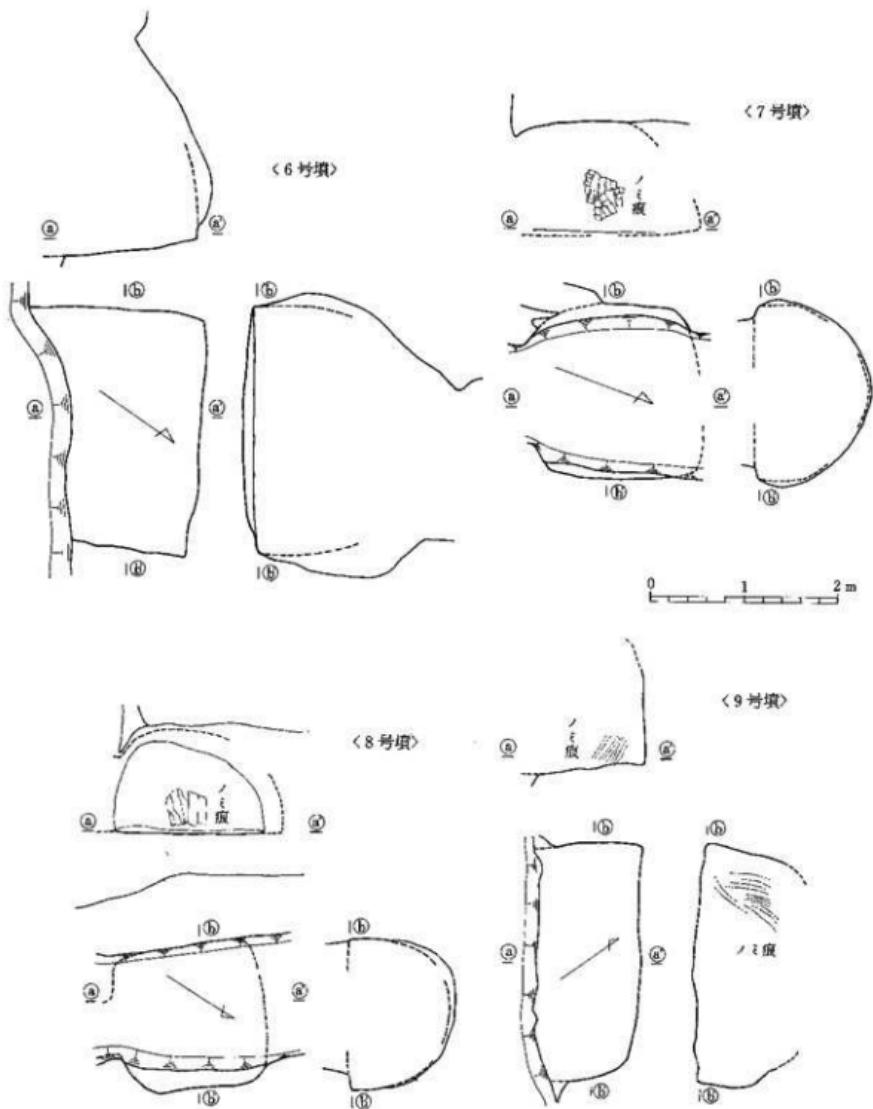
- 立面形態…天井部崩落の為不明。

- 床面の状況…全般に凹凸目立つ。玄門方向にゆるやかに傾斜。

- 壁面の状況…奥壁、側壁ともに細かい不定方向ののみ整形痕が全体に見られる。

(j) 第10号墳

○位置…上段。9号墳の東隣りに並列。西南に開口。車道の下側に深く入りこんで危険な為



第6図 横穴実測図(3)

調査は行わなかった。

○遺存状況…内部に大小の礫、ゴミ土などがたまって内部は全く不明。

④ 出土遺物について

(a) 須恵器(長頸壺)(図版7-2)

1号墳玄室前方の床面付近より1点のみ出土した。底部、体部下半および口唇部を欠くため、全体の正確な器形復原はむずかしい。

ロクロ挽きの際の細線が横方向に走る。色調は灰色で、体部肩部には、自然釉と見られる暗緑色の灰釉がついている。出土状況から見て、被葬者の副葬品と見てよい。

(b) 出土人骨について

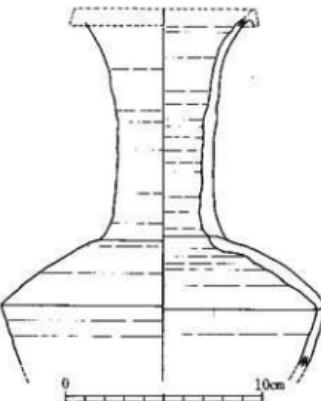
人骨は愛宕山1号墳横穴底面第4層の粘質の強い黒色粘土層の上面より発見されたものである。(第4図上)

発見時わずかに周辺の土質の色と区別がつく程度に腐蝕が進み、粉状あるいは泡状化した、保存状態のきわめてよくない人骨である。出土したすべての人骨は土圧の影響を著しく受けている。また頭骨および長管骨のそれぞれの位置関係は埋葬時の状態とは推定しがたく、埋葬後になんらかの移動があったと推定される。出土人骨が一體のものと推定することもできるが、断定することはできない。

頭蓋骨は頭頂骨、後頭骨、右側頭骨、上顎骨などのそれぞれの一部および左下顎骨片などが残存した頭骨のすべてであり、他は消失していない。脊柱は完全に消失していて体軸線は不明であるが、頭骨の仰臥位の出土状況のみから考へた場合、埋葬方位は東南東と推定することができる。もしこの人骨が同一個体のものなら、さきに述べたように埋葬後の移動が考えられ、この出土状況からは埋葬姿勢を判定することはできない。

性別については、腸骨、坐骨のそれぞれの一部が出土しているが、性別の鑑別点の消失で判定はできないが、右側頭骨の乳様突起片の外側への膨脹度、大きさから男性と推定することができる。長管骨からは性別は判定しがたい。

頭蓋片の縫合はすべて消失しているが、頭骨、上肢などに老人性の変化は全く認められないこと、右下顎骨片に第三大臼歯萌出を示す歯槽の部分の残存することなどから、壮年



第7図 須恵器実測図

期から熟年期の個体と推定することができる。

出土した頭蓋部に残存していた歯は上、下の右第二大臼歯のそれぞれ1個で、それも歯根、象牙質の部分は消失、エナメル質のみであり、これらの歯冠の咬耗度はBrocaの1度で、咬耗は現われているが、歯冠結節は明瞭で、ほぼ水平な状態で咬耗は進んでいる。この人骨の中で比較的保存状態のよかつた頭頂骨片も土圧の相当の影響を受けていて変化著しく、しかも外板と板間層の間に骨折が生じ、縫合はすべて消失、型の頭蓋骨観察は不能である。下顎骨片もろくボロボロしていて観察、計測の対象とはならない。

上肢、下肢の長管骨と左坐骨片、左腸骨片も頭蓋片と同じく土圧による変形著しく、また四肢骨の小さな骨はすべて消失していない。長管骨も骨端はすべて消失し、観察、計測の対象にならない。

頭蓋片の一部と四肢骨の一部が同一個体のものであると推定することもできるが、出土状態からはそれ以上の個体数も想定することができるので、同一個体のものとは断定することはできない。

いまこの人骨を同一個体のものと推定するならば、この人骨は壮年期から熟年期にかけての男性人骨と推定することができる。

5.まとめ

- ① 今回の調査区域内では、少なくとも10基の横穴の存在が確認され、内、9基について調査を行った。
- ② 確認された横穴のはほとんどが、宅地の建設や、戦中の防空壕築造時の廃の変造を受けており、玄室のみが遺存しているものがほとんどであった。
- ③ 各横穴は、いずれも南面した崖面の凝灰岩層をくりぬいて造られ、横穴の開口方向は、東南のもののが多かった。
- ④ 横穴の立面分布は、全体に上下二段に分けられる。
- ⑤ 横穴の平面形態は、正方形、長方形のものなど方形のものが多く、規模として最大のものは、1号墳の3.2m(軸長)×2.6m(幅)であった。立面形態としては、アーチ形(蒲鉾形)のもののが多かった。また、3号、4号墳は、構造的に、他の横穴と異なり、袋状を呈し、規模も小さいものであった。
- ⑥ 1号、2号墳など、床面の遺存状況の良好なものでは、玄室から玄門方向にかけて、巾10cm前後、深さ5~6cmの排水溝が検出できた。
- ⑦ 壁面の遺存のよいものでは、巾数cm前後、上下方向のみ整形の痕跡が見られた。

- ⑧ 1号墳床面から、腐蝕した人骨および副葬品と見られる須恵器（長頸壺）1点が出土した。他の横穴からの出土品はなかった。
- ⑨ 愛宕山横穴群は、構造形態、出土品などから見て、7世紀後半から8世紀頃にかけて、仙台地方にすんだ豪族の墳墓と見られる。

6. 仙台市内の横穴群とその地域的位置づけについて

現在仙台市内では、8ヶ所で横穴古墳が検出されている（表、第8図）。

これらは、地形的には東流する3つの河川（七北田川、広瀬川、名取川）によって開拓された、3つの東西にのびる丘陵の東端部斜面もしくは崖面に形成されている。これら8ヶ所の横穴も地域ブロック毎のまとまりという観点から見ると、大きく4つのブロックに分けることができる。

まず、それぞれのブロック毎に北からその分布状況を見てみたい。

Aブロックは、七北田川北岸、七北田丘陵から南方向に分岐した3つの枝尾根の斜面に多数の横穴群が群在する。それぞれ別の尾根状に位置する為、従来は別個の呼称をされてきたが、地域的に見れば互いに密接な関連を有する横穴群である。いずれも未調査の為、実態は不確定であるが、総数100基は下らない横穴群が群在すると思われる。なお、このブロックの存在する丘陵の反対側（すなわち、北東斜面）利府町菅谷地区にも一大横穴群ブロックが存在する。

Bブロックは、台原小田原丘陵東端部南側の枝尾根の斜面に一ヶ所だけ形成された。これが、仙台市指定（昭和43年）の善応寺横穴群である。この横穴は古くから歴史的興味の間で注目され、特に戦後は幾度かの発掘調査がなされ、多種多様の横穴が群在することが判明し、総数も100基を下らないと推定されている。

C、Dブロックは、西多賀、長町丘陵東端部の南北両斜面に多く群在しているが、いずれも、未調査で実態不明の横穴群である。

Cブロックは、西多賀長町丘陵北側斜面、広瀬川南岸の枝尾根愛宕山を中心として群在する。この付近は第二次大戦前後より宅地化が急速に進展した地域で、宅地化の際は、人骨や須恵器、直刀などが出土したとかの噂がかなりあった地域であり、総数も100基を越えると推定されるが、人骨の形跡著しく全般に保存良好なものは数少ない。

Dブロックは、戦後、発見された横穴群で、位置的には名取川北岸、西多賀長町丘陵南斜面にある。向かいあつた二つの枝尾根の斜面に、未調査であるが総数100基前後に達するものと思われる。

ところで、このような市内横穴群のブロック毎の分布状況を見ていくと、その周辺に時代的・地域的に関連のある遺跡がいくつかとりまいていることが指摘される。ここでは特に、横穴と

いうものの形成基盤として、弥生時代以後形成されたと考えられる自然村落的定住集落跡および文化的階梯の上で前後の段階を占めていると考えられる高塚古墳、官衙遺跡などを主たる対称として列挙してみた。

A ブロックでは、從来、これと関連するような遺跡はほとんど見出されなかつたが、最近、七北田川南岸、自然堤防上に自然村落的集落跡が存在することが、まだ報告書は出ていないが宮城県教委などの調査で確認されている。

B ブロックでは、断片的ながらいくつかの集落跡、古墳との関連が想定できる。

C ブロックは、市街中心部に近接し、宅地化の進行の為、周辺部分に関連する遺跡の存在を見出すことは困難だが、やや距離的に離れるが、準関連遺跡として南小泉地区の古墳、集落跡との結びつきを想定したい。

D ブロックは、横穴の発見が新しかったのとは対照的に古くから古墳や集落跡の存在が知られ、また最近まで典型的な田園地帯であった為、関連する遺跡の存在を想定することが容易である。

以上のような想定のもとに横穴の分布状況を見なおしてみると、それらは強く地域のあり方に結びついていることが指摘できると思われる。逆にいえば、横穴のあり方から、地域のあり方を想定することが可能であるともいえる。仙台市内の横穴群はまだ未調査のものが多く、従ってその実態もはっきりしない部分が多いが、しかし、從来まで知られてきた各横穴の形態、構造から判断して時期的にはほとんど同時代のものと見てよいと思われる。してみると各ブロックの横穴は、各々の同時代的な地域のあり方を代表している面もあると見てよいだろう。たとえばA ブロックは七北田川南岸自然堤防上の自然村落を基盤とし、B ブロックは小田原丘陵東南方、七北田川支流梅田川周辺の自然村落、C ブロックは広瀬川東北岸の自然堤防上に形成された自然村落、D ブロックは名取川北岸、西多賀耕土を中心とした自然村落を、各々基盤としていると考えられる。愛宕山横穴群は、仙台市中心部を基盤としていたと見られる点で、位置的にも実質的にもその中の重要な位置を占めていたと考えられるのである。

註

- ① 菊地武一「仙台の金石文」(『仙台市史第5巻』P328, 昭26)
- ② 伊東信雄「仙台市内の古代遺跡」(『仙台市史第3巻』P68, 昭25)
- ③ 同上
- ④ 清水東四郎「宮城県内の古墳及横穴」(『宮城県史蹟名勝天然記念物調査報告第12編』P27~28, 昭13)
- ⑤ 山中樵「仙台市外大字寺山の横穴」(『考古学雑誌1の2』P146,)
- ⑥ 伊東信雄、氏家和典「仙台市燕沢善応寺横穴古墳群調査報告書」(仙台市教育委員会刊, 昭43)
P31
- ⑦ 同上, 図版第28の13

表 仙台市内の横穴群と関連遺跡

(昭和49年4月現在)

| 横穴名稱 | | 概要 | 備考 | 関連遺跡 | 概要 | 備考 | | | |
|-----------------------|-----------|---|---------------------|-----------|--|----------------------|--|--|--|
| A ブ ロ フ ク | 1 入生沢横穴群 | 數10基? 小型、家型、アーチ型など | 一部破壊 | a 鷲ノ巣遺跡 | 古墳-中世船着跡、土師器、須恵器、中世陶器。 | 一部新幹線予定地 昭47-48調査 | | | |
| | 2 台原敷横穴群 | 數10基? アーチ型、ドーム型、石棺状棺台あり | 保存良 | b 今市遺跡 | 上部悉、中世陶器。 | | | | |
| | 3 東光寺横穴群 | 10数基以上。変造せるもの多し | | | | | | | |
| B ブ ロ フ ク | 4 菩提寺横穴群 | 100基前後。アーチ型、ドーム型、変形ドーム型。 小型など、土師器、須恵器、玉類、鉄製品など出土。 昭25、昭35~36、昭42 発掘調査 (報告書あり) | 昭43、仙台市指定、一部破壊 | c 千人塚古墳 | 円墳(径15m、高3m) | | | | |
| | | | | d 黒沢遺跡 | 鶴文-奈良・平安集落、鐵文土器、土師器、布目瓦。 | 一部バイパスで破壊 | | | |
| | | | | e 菩提寺古墳 | 円墳(径35m、高5m) 昭37調査、(宅地) | | | | |
| | | | | f 新田町遺跡 | 土師器。 | | | | |
| | | | | g 陣屋町分守跡 | 8~11世紀、方800尺、東大寺式御堂、瓦、土師器、須恵器。 | 大正11年測定 | | | |
| | | | | h 陣屋町分尼寺跡 | 方400尺?、昭42、金堂 須恵器、瓦、土師器出土。 | 昭23調査 | | | |
| C ブ ロ フ ク | 5 愛宕山横穴群 | 愛宕山南北斜面に數10基。(A地点北斜面、B地点南斜面) 人骨、刀子、須恵器出土。 昭48、B地点調査(報告書あり) | 宅地化著しく、相当損壊、変造。 | i 孝勝寺古墳 | 円墳、径15m、高3m。 | | | | |
| | 6 大年寺山横穴群 | 大年寺山北斜面に數10基。 | | j 法領寺古墳 | 円墳(径30m、高5m) 横穴式石室、鉄製品。 | | | | |
| | 7 京桜寺横穴群 | 京桜寺北斜面に數基 | | k 遠見塚古墳 | 前方後円墳(主軸長110m、高7m、粘土被、土師器)。 | 昭43、国指定、一部破壊 | | | |
| D ブ ロ フ ク | 8 土手内横穴群 | 三神峯北側斜面(A地点)及び妙利川北岸斜面(B地点)に合計數10基存在。昭23(4)、河川改修の際発見。人骨、刀子、須恵器出土。 | 砂押川北岸 宅地化のため一部破壊 | l 南小泉遺跡 | 弥生-奈良・平安集落、弥生土器、十輪器、土師器。 | バイパスおよび飛行場建設で一部破壊 | | | |
| | | | | m 妙利川古墳 | 円墳? (径60m、高6m) 須恵器、蓋石。 | 一部、道路で別途 | | | |
| | | | | n 一琴古墳 | 円墳(径30m? 高4m) 平石積石室、家形石室 鳥文鏡など。 | 昭39、埋藏 (宅地) | | | |
| | | | | o 二琴古墳 | 前方後円墳(径30m、 高4m) 家形石室、埴輪。 | 埋藏(昭24) | | | |
| | | | | p 三神峯遺跡 | 鶴文-奈良中期集落跡、 鶴文土器、石器。 | | | | |
| | | | | q 三神峯古墳 | 円墳2基(径16m、13m) 盛制の形跡著しい。 | | | | |
| | | | | r 裏町古墳 | 前方後円墳(径40m余 高4m) 砂輪、葺石、 朱文鏡、須恵器。 | 昭45調査、埋藏 (報告書あり) | | | |
| | | | | s 袋遺跡 | 弥生-奈良・平安集落跡、 弥生土器、土師器、須恵器、埴輪。 | 一部破壊 | | | |

(○横穴、×高塚古墳、△集落跡)

第8図 仙台市内の井戸群と開港道路分布図





図版 I 向山周辺航空写真 (縮尺 1 : 12,500) ○印は調査地点

(昭和46年10月撮影)



1. 愛宕山横穴群 B 地点



2. 愛宕山横穴群
A 地点



3. 大年寺山横穴群



1. 爰宕山櫛穴群B地点第1次調查着手前



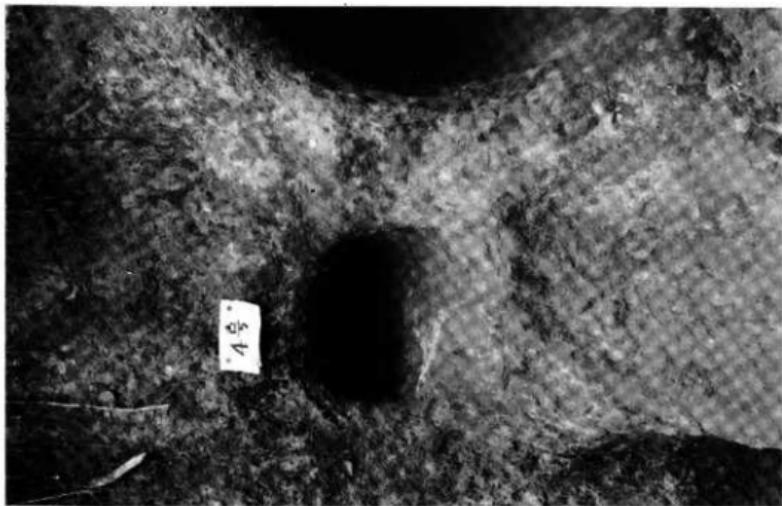
2. 第1次調査状況



1. 1号墳玄室



2. 2号墳玄門部



2 45



1 2 3



24. 雷家溝河谷邊緣



1. 6呎² 7呎² 8呎² (右心)



1. 9号坑



2. 1号坑出土瓦甄



3. 第2次調查區



4. 第2次調查狀況

仙台市文化財調査報告書刊行目録

- 第1集 天然記念物並置下セコイア化石林調査報告書（昭和39年4月）
- 第2集 仙台城（昭和42年3月）
- 第3集 仙台市燕沢善光寺横穴古墳群調査報告書（昭和43年3月）
- 第4集 史跡陸奥國分尼寺跡環境整備並びに調査報告書（昭和44年3月）
- 第5集 仙台市南小泉法螺塚古墳調査報告書（昭和47年8月）
- 第6集 仙台市荒巻五本松窓跡発掘調査報告書（昭和48年10月）
- 第7集 仙台市富沢裏町古墳発掘調査報告書（昭和49年3月）
- 第8集 仙台市向山愛宕山横穴群発掘調査報告書（昭和49年5月）

仙台市文化財調査報告書第8集

愛宕山横穴群発掘調査報告書

昭和49年5月発行

発行 仙台市教育委員会

仙台市鏡町3-7-1

仙台市教育委員会社会教育課

印刷 株式会社 東北プリント

仙台市立町24-24 TEL (25) 6466(代)



文化財保護シンポジウム